

# 米芾『書史』考（一）

## A commentary on Mi-Fu's "Shu-Shi" (part1)

文学研究科人文学専攻博士後期課程在学

吉 田 悟

Satoru Yoshida

### ・ 緒言

北宋の著名な芸術家、米芾（1051～1107）の著作と伝えられる『書史』（成立年次不明）は、すでに中田勇次郎氏によって訳出が行われているが、今回の論文ではそれを補う形で、『書史』の[序]から[14]までを考証した。内容としては、米芾の眼を読み解く、またそれを理解するに有益な周辺情報を洗うことに精力を注いだ。浅学で、まだ充分な考証はなされていないが、力の及ぶ限り精力を注ぎたい。なお、主に参照した文献は、『米芾』研究篇（中田勇次郎著・二玄社〔絶版〕・1982年）と『米芾集』（黄正雨、王心裁輯校・湖北教育出版社・2002年5月）である。文中で「中田注」と記されているのは、『米芾』研究篇からの引用を示す。尚、人名には、

『中国人名大辞典』（臧励穌等・台湾商務印書館・1921）

『歴代人物年里碑伝綜表』（陶秋英校本・中華書局・1959）

『宋人傳記資料索引』1～6（昌彼得他編・鼎文書局・1977～1980）

『宋人傳記資料索引補編』1～3（李国玲編・四川大学出版社・1994）

『中国書論大系』1～18（中田勇次郎編・二玄社・1977）（今回は1～6を参照）

などを参照し、語彙には、

『大漢和辞典』（修訂版）十二巻・索引一卷（大修館書店・1984～1986）

『漢語大詞典』十二巻・索引表附録一卷（上海辞書出版社・1986～1994）

などを参照した。

底本は「百川学海」本を使用した。それ以外の各テキストの表示は以下の通り。

**四庫** 「四庫全書」本

**王氏** 「王氏書苑」本

**湖北** 「湖北先正遺書」本

**說郛** 「說郛」宛委山堂本

**拾遺** 「寶晋山林集拾遺」本『北京圖書館古籍珍本叢刊』巻89（北京圖書館古籍出版編輯組・書目

## ・『書史』考

### [序]

金匱石室、汗簡殺青、悉是傳錄、河間古簡、為法書祖。張彥遠志在多聞、上列沮蒼、按史發論、世咸不傳、徒欺後人、有識所罪。至於後愚妄作、組織神鬼、止可發笑。余但以平生目歷、區別無疑、集曰『書史』、所以指南識者、不點俗目。

### <字句異同>

- ・ 目歷 拾遺では「目力」とするが、これは単なる誤植であろう。

### <人名>

- ・ 張彥遠 815～？ 張弘靖の孫。字は愛賓。博学で文辞に工で、乾符年間（874～879）に大理寺卿に至った。著書に『法書要録』十卷、『歷代名画記』十卷がある。前者は漢から唐に至る書論を集成したもので、後者は画史・画論を展開して画人の伝記を詳述した。旧唐書：卷129 新唐書：卷127
- ・ 沮誦 黄帝の右史で、蒼頡と共に文字を造ったとされている。
- ・ 蒼頡 黄帝の左史。生まれながらに四つの目があり、天界の現象を観察し、鳥の足跡や亀甲の図形になぞらえて、文字の形を定めたとされる。古代の伝説中の漢字の創造者である。

### <注・考>

- ・ 金匱石室 古代に、書契や文献を保存しておいた所。『漢書』高帝紀下「又與功臣剖符作誓、丹書鐵契、金匱石室、藏之宗廟。」顔師古注「如淳曰、金匱、猶金滕也。以金爲匱、以石爲室、重緘封之、保慎之義。」
- ・ 汗簡 火を以って竹簡をあぶって、書写に供したるもの。漢・劉向『別録』「殺青者、以火炙簡令汗、取其青易者、復不蠹、謂之殺青、亦謂汗簡。」
- ・ 殺青 古代の竹簡を作る作業の一つ。竹を火で炙って水分を抜き取り、青色の表皮を剥がして、書写と蠹（紙を食べる虫）を防ぐのに便利をはかる。『後漢書』呉祐傳「恢欲殺青簡以寫經書。」
- ・ 悉是傳錄 この時代、木簡等の出土があったことが『東觀餘論』の「漢簡辨」に記載されている（近歲關右人發地得古・中有東漢時竹簡甚多、往往散亂、不可攷。獨永初二年詩美符文字尚完、皆章草書、書蹟石雜可喜、其詞云、「永初二年六月丁未朔二十日丙寅得車騎將軍……」）。また『群玉堂帖』行書帖に次のような事が記されている。「篆便愛咀楚・石鼓文。又悟竹簡以竹事行漆、而鼎銘妙古老」。これからすると、米芾は竹簡を実際に目撃していたということになる。
- ・ 河間 漢の河間獻王劉徳の事を指す。南朝・梁任昉「齊竟陵文宣王行狀」 「陳農所未究、河間薦雅而罕御、故汲黯致譏於天馬也。」

『寶章待訪録』の序には「漢河間憲（獻）王購書、必録古簡」とある。

- ・ 古簡 古代の汗簡。 元・陸友仁『硯北雜志』卷下「竹簡之法、絶而不傳。米元章得古簡、始更制法。」
- ・ 法書 名家の書法の范本。習字の手本。 北齊・顔之推『顔氏家訓』雜藝 「吾幼承門業、加性愛重、所見法書亦多、而翫習功夫頗至、遂不能佳者、良由無分故也。」
- ・ 張彦遠志在多聞…有識所罪。 歷代名画記の卷1では「画の源流を叙ぶ」として、文字や画が創造された伝説から説き起こして、絵画の意義について張彦遠が熱っぽく語っている。また卷4では、「歴代の能画の人名を叙ぶ」として、黄帝の時代の史皇から時代順に絵画の歴史を叙述している。米芾は、伝わっている作品が無いのに、伝承のみで絵画の歴史を説いた張彦遠を非難しているのであろう。こうしてみると米芾は極めて実証的な立場に立っていると考えられる。
- ・ 至於後愚妄作、組織神鬼…

愚妄 愚かで物の道理に暗く、でたらめなこと。漢・朱浮「爲幽州牧與彭寵書」 「今乃愚妄、自比六國」

組織 ほどよいように処置して整頓すること。 元・羌介翁「覓裳中序第一」春晚旅寓詞 「園林罷組織、樹樹東風翠雲滴。」

神鬼 迷信的な神霊や鬼怪のこと。北魏・酈道元『水経注』河水二 「嚴堂之内、每時見神人往還矣。蓋鴻衣羽裳之士、練精餌食之夫耳。俗人不悟其仙者、乃謂之神鬼。彼羌目鬼曰唐述、復因名之爲唐述山。」

ここで、後愚妄作とは何を指しているのか、俄に断じ難いが、おそらく張彦遠の『歷代名画記』と同じ方法で作られた、種々の書論などを指すのであろう。

- ・ 區別無疑…

區別 区分、弁別すること。 『論語』子張 「譬諸草木、區以別矣。」

米芾は、張彦遠を上記の理由で非難した上で、更に偽作と真跡（模）との區別を『書史』での使命としたと考えられる。この姿勢は『寶章待訪録』と『書史』とでは異なっているものである（『寶章待訪録』の序文の最後の部分は、「見浸多懼久廢忘、因作寶章待訪録、以俟訪圖書使焉」であるから、もっと消極的な意味であったと考えられる）。『書史』では、法帖を入手した経緯や、その経緯での出来事、入手後の出来事、更にその法帖の鑑識、またその法帖を臨書した自分の作品がどうなったか、同時代の人間がどのようなことをしていたのかなど、周辺情報が極めて詳細に記されている。そういった米芾の使命感が、この「區別無疑…」以下の言葉に表れている。

[1]

劉原父收周鼎篆一器、百字、刻跡煥然、所謂金石刻文、與孔氏上古書相表裏、字法有鳥跡自然乃狀。宗室仲忽、李公麟收購亦多。余皆嘗賞閱、如楚鍾刻字、則端逸、遠高秦篆、咸可冠方今法書之首。秦

漢石刻、塗壁都市、前人已詳。余閱書白首、無魏遺墨、故斷自西晉。晉賢十四帖、檢校太師李瑋於侍中王胎永家購得、第一帖張華真楷、鍾法、次王濬、次王戎、次陸機、次郗鑒、次陸表、晉元帝批答、次謝安、次王衍、次右軍、次謝萬兩帖、次王珣、次臣詹、晉武帝批答、次謝方回、次郗愔、次謝尚、內謝安帖、有開元印、縫兩小璽、建中翰林印。安及萬帖有王涯永存珍秘印、大卷前有梁秀收閱古書印、後有殷浩印、殷浩以丹、梁秀以緒、是唐末賞鑑之家、其間有太平公主胡書印、王溥之印。自五代相家寶藏。侍中、国壻、丞相子也。

<字句異同>

- ・ 劉原父 **拾遺**「父」を「甫」とする。
- ・ 上古書相表裏 **拾遺**「相」を「命」とする。
- ・ 字法 **拾遺**「字」を欠く。
- ・ 自然乃状 **拾遺**「状」を「處」とする。
- ・ 余皆嘗 **拾遺**「余」を欠く。
- ・ 如楚鐘 **拾遺**「如」を欠く。
- ・ 則端逸 **拾遺**「則」を欠く。
- ・ **拾遺**「故斷自西晉」を以って一則を終了し、次の「晉賢十四帖」を別段にする。
- ・ 殷浩以丹、梁秀以緒 **四庫**は「浩以丹、秀以緒」とする。**拾遺**は「浩」を「詰」に作る。
- ・ 胡書印 **四庫**は「胡」を「親」とする。
- ・ **拾遺**「胡書印」から次の「王溥」を別段にし、「太宗皇帝」からまた別段とする。
- ・ **拾遺**「王溥」の次の「之印」二字を欠く。更に、「相家」の次の「寶藏」二字を欠く。

<人名>

- ・ 劉敞 1019－1068 字は原父、公是と号した。臨江新喻の人。慶曆6年に進士となり、官は集賢院學士、判御史臺を歴任した。學問淵博であったという。熙寧元年4月に年50で卒した。春秋に長じ、『春秋權衡』『春秋傳』『春秋意林』『春秋說例』合わせて41卷がある。また『七經小傳』5卷・『公是集』60卷がある。 宋史：卷319
- ・ 趙仲忽 ？－？ 字は周臣、草書を能くした。草法は円美であると言われている。 皇宋書録
- ・ 李公麟 1049－1106 字は伯時、舒州の人。南唐李昇の四世の孫である。熙寧三年に進士となった。古を好み博學で、詩に長じた。また多く奇字を知り、夏商より以来の鐘鼎尊彝について、皆よく世次を考訂し、文字を弁別した。また善く山水仏像を画いて、山水は李思訓に似、仏像は吳道子に近かった。官は後省刪定官、御史檢法などを歴任した。崇寧5年に卒す。年は58。『考古図』5卷がある。 宋史：卷444
- ・ 李瑋 ？－？ 字は公炤。杭州錢塘の人。官は駙馬都尉で、卒して太師中書令を贈られた。李瑋は善く水墨竹石を作り、平生は善く吟詠をした。才思敏妙で、また草草飛白をよくした。 宋史：卷464

- ・ 王胎永 ？-？ 字は季長、初めの名は克明といった。並州祁縣の人。王溥の孫である。性は清廉謹慎で言葉少なく、頗る書に通じたという。皇祐元年に樞密使檢校太傅より同平章事となり、加えて侍中を兼ねた。胎永が樞密にいた15年間は、過失が無く、人はその謙静を称えたという。卒して諡は康靖という。 宋史：卷464
- ・ 張華 232-300 字は茂先。方城の人。学業は非常に広く、予言や占いの術や、医術・神仙術の書、全て詳細に閲覧していないものはなく、記憶力が強く、無言のうちに理解することができたという。武帝の時に中書令を拝し、恵帝の時には太子少傅を拝し、光祿大夫に昇進した。張華は人物を好み、人に登用することを薦めて倦むことがなかったという。卒した日には、家に余分な金銭は無く、ただ文学・歴史等の書物が家に満ちていたという。著書に『博物志』がある。 晋書：卷36
- ・ 王濬 205-246 字は士治。湖州の人。古代の典籍を広範な地にわたって読みあさったという。寛闊にして大志があった。官は撫軍大將軍に至った。卒して諡は武。 晋書：卷42
- ・ 王戎 234-305 字は濬沖。幼くして聡明で、風采も立派であったという。王戎には人倫を見極める力があったという。官は司徒に至った。諡は元。 晋書：卷34
- ・ 陸機 261-303 字は士衡。呉郡の人。若くして人並み優れた才能を持っていたという。弟の陸雲とともに文章家として名高い。呉の滅亡に慷慨して「辨亡論」二篇を著した。官は平原内史に至った。『陸平原集』がある。書としては、「平復帖」（北京故宮博物館）が伝わっており、晋代のもっとも信頼の置ける遺品として重要である。 晋書：卷54
- ・ 郗鑒 269-339 字は道徽。経籍を博覧し、学者としても名高い。明帝の時に安西將軍を拝した。車騎將軍、都督徐兗青三州軍事を歴任し、南昌縣公に封ぜられる。太尉にまで昇進した。諡は文成。 晋書：卷67
- ・ 陸統 不詳 陸玩のことか。陸玩（278-341）は、字は士瑤。呉の人で、陸機の従弟にあたる。器量の大きな人物で、若い時から名声が高かったという。 晋書：卷77
- ・ 晋元帝 276-322 司馬睿。字は景文。河内温の人。東晋創業の君主。 晋書：卷6
- ・ 謝安 330-385 字は安石。陳郡陽夏の人。40歳ごろまでには仕官せず、会稽に幽棲して、王羲之、許詢、支遁らと交友した。後に衆望をになって政治にたずさわり、吏部尚書の官に至った。建昌縣公に封ぜられ、太保を拝し、死後太傅を贈られた。その穏やかで心の広い人柄は、上流士人に深く慕われたという。多くのことに造詣が深く、意をめぐらすところは常に他人の到底真似できない境地にまで達していたといわれる。諡は文靖。 晋書：卷79
- ・ 王衍 256-311 字は夷甫。琅邪群の臨沂の人。官は太尉にまで至った。高い才能があり、聡明さは神の如くであったといわれ、好んで名家の論理を談じ、老荘の精神を会得していた。物事の道理を論じて自分の主張に不安を覚えると、すぐに自説を翻して言い直したために、「口の中に雌黄を持っている」と言われた。晋代の士大夫が清談を好み、それにふける風潮を生み出したも

とは王衍であると言われる。 晋書：卷34

- ・ 王羲之 303—361、306—364、307—365、321—379諸説あり。字は逸少。瑯邪臨沂の人。秘書郎、寧遠將軍、江州刺史、右軍將軍、会稽内史を歴任。内史を退官後は、名士とともに山水の間に遊んだ。子の王献之とともに二王と称される。書聖と仰がれ、後の時代の書に大きな影響を与え続けている。 晋書：卷80
- ・ 謝萬 320—361 謝安の弟。字は萬石。官は予州刺史にまで至った。才器は優秀で、早くから世間の人からの評判が高かった。言論に工で、文章をよくした。 晋書：卷79
- ・ 王珣 349—400 王洽の子。字は元琳。弟の珉と二人して名高い。官は尚書令にまで至った。学問に優れ、文章を善くしたという。東亭侯に封ぜられた。諡は獻穆。 晋書：卷65
- ・ 臣詹 不詳
- ・ 晋武帝 236—290 司馬炎。字は安世。魏の禪讓を受けて晋を建国。呉を討伐し、漢末以来の分裂数十年の歴史に幕を降ろした。初めは儉約を貴んだが、後に女色に溺れ次の惠帝の時代に起こった八王の乱の先駆となった。 晋書：卷3
- ・ 謝方回 不詳
- ・ 郗愔 313—384 郗鑒の子。字は方回。高平の金郷の人。天師道を奉じて、政務を軽んじたが、官は平北將軍、会稽内史、司空に至った。諡は文穆。 晋書：卷67
- ・ 謝尚 309—358 字は仁祖。秣陵の人。尚書僕射まで至った。幼いころからすぐれた気質を持ち、聡明さは群を抜いていたという。音楽を得意とするほか、諸芸に広く通じていた。諡は簡。 晋書：卷79
- ・ 王涯 ?—835 字は廣津。進士となり、中書侍郎、同中書門下平章事を歴任する。鄭注等と宦官を謀誅しようとして、事が洩れて殺された。 新唐書：179 旧唐書：卷169
- ・ 梁秀 不詳 米芾は唐末の賞鑑家であるという。
- ・ 殷浩 不詳 同上
- ・ 王溥 922—982 字は齊物、並州祁縣の人。後漢の乾祐元年に進士甲科となり、後周に仕えて、中書侍郎平章事となる。太平興国7年に年61で卒し、祁国公に封ぜられる。諡は康獻。著に『唐會要』100卷、『五代會要』30卷、及び文集20卷がある。 宋史：卷249

<注・考>

- ・ 孔子上古書 孔安国尚書序「濟南伏生。年過九十。失其本經。口以傳授裁二十餘篇。以其上古書。謂之尚書」(中田注：P36)
- ・ 塗壁都市、前人已詳。 不詳
- ・ 開元印 『歴代名画記』卷3に「玄宗皇帝自書の開元の二小字を一印となす」とある。
- ・ 永存珍秘印 同上「故犯法の人、宰相王涯の印」とある。
- ・ 翰林印 同上「又た集賢印・秘閣印・翰林印あり。各の判司の収め掌るところの図書を以って印

を定む」とある。

- ・ 太平公主胡書印 同上「太平公主の駙馬（婿）武延秀の玉印は胡書四字なり。梵音にて三藐母駄と云う」とある。
- ・ この晋賢十四帖の謝安帖は、米芾が後に手に入れた「八月五日帖」のことで、張丑の『真蹟日録』二集：眞晋齊記には陸機の帖が「平復帖」であったことが記されている。中田注P69～73に詳細な考証が載せられている。それ以外のものとしては、『東坡題跋』巻4に「余嘗於李都尉瑋處、見晋人數帖、皆有小印涯字。意其爲王氏物也。有謝尚謝鯤王衍等帖、皆奇。而夷甫獨超然如羣鶴聳翅、欲飛而未起也」とあり、『寶晋齋法書贊』巻20には「米元章臨晋武帝大水帖 草書四行・尾記一行」という記載がある。武帝帖の釈文は次の通り。「去歲大水。城中大飢。撫別君便常分南諸軍耳。此奈卒無所復。箭已送。 右晋武帝書。李太師瑋本。 右晋武帝大水帖。先臣芾手臨真蹟。臣米友仁鑒定。恭跋。二行（空白は段が変わることを示す)」。またそれに次ぐ岳珂の文は次の通りである。「右寶晋米公、手模晋武帝大水帖、真蹟一卷。寶晋平生自言、法書斷自西晋。其作『書史』、載李瑋家、所得晋賢十四帖、中有臣詹晋武帝批答一、豈此耶。臣詹不知何人、不足模。故止及武帝書耳」。

## [2]

太宗皇帝文德化成、靖無他好、留意翰墨、潤色太平。淳化中嘗借王氏所收書、集入閣帖十卷、內鄙悖兩行二十四日帖、乃此卷中者、仍於謝安帖尾御書親跋三字以還王氏、其帖在李瑋家。余同王換之飲於李氏園池、閱書畫竟日、未出此帖。棗木大軸、古青藻花錦作標、破爛、無竹模、晋帖、上反安冠簪樣古玉軸。余尋製擲棗軸池中、拆玉軸、王渙之加糊、共裝焉。一坐大笑、要余題跋、乃題曰、「李氏法書第一」。亦天下法書第一也。又晋謝奕、桓温、謝安三帖為一卷、上有寶蒙審定印、謝安帖後以濃墨模榻、遂全暈過、後婦副車王詵家、分為三帖、云失謝安帖、以墨重暈。唐人意寶此帖、而反害之也。後人可以為戒。李瑋云、「亦購於王氏」。

<字句異同>

- ・ 集入閣帖十卷 拾遺「集」の前に「以」が入り、後ろの「入」が欠ける。
- ・ 仍於謝安帖尾御書親跋三字 拾遺「仍」を「而」に、「安」を「公」に作る。「尾」を欠く。王氏「三」を「二」に作る。
- ・ 王渙之飲於李氏 拾遺「於李氏」を欠く。
- ・ 閱書畫竟日、末日 拾遺「竟日」を欠く。説郛「末」を「未」に作る。
- ・ 古青藻花錦作標 拾遺「作」を欠く。「標」説郛、拾遺「標」に作り、四庫は「標」に作る。
- ・ 無竹模 拾遺「竹」を欠く。
- ・ 上反安冠簪樣 拾遺「樣」を欠く。
- ・ 余尋製 王氏、四庫は「製」を「裂」に作る。

- ・ 乃題曰 **拾遺**「乃」を「余」に作る。
- ・ **拾遺**、「又晋謝奕桓温謝安三帖」を別段に作る。
- ・ 寶蒙審定印 **拾遺**「審定字印」に作る。
- ・ 以濃墨模榻 **拾遺**「模榻」を欠く。「榻」字は「擗」の誤刻であると指摘する(『米芾集』P140)。

<人名>

- ・ 太宗皇帝 939-997 趙灵。北宋第二代皇帝。呉越・北漢を滅ぼして天下の統一を完成。内政面では、藩鎮勢力をほりくずし、専売・商税などの税制を整備して財政を豊かにし、集権的支配体制の確立につとめた。しかし軍事力の弱화를招き、燕雲16州を金から奪回することができなかった。文人政治を徹底し、内府所蔵の古名蹟を出して、翰林侍書の王著に命じて石刻させ、十巻の法帖として淳化3年(992)に完成した。これが『淳化秘閣法帖』である。 宋史：巻4、5
- ・ 王渙之 1060-1124 字は彦舟、常山の人。元祐中に太学博士になる。性は淡泊であったという。宣和6年に年65で卒した。 宋史：巻347
- ・ 王誥 ?-? 字は晋卿、太原の人。後に開封に居した。駙馬都尉、利州の防禦使となる。蘇軾と共に交友し、党籍を以って流され卒した。諡は榮安。詩を能くし、書画を善くした。また囲碁も工であったという。堂を作って寶繪と名付け、古今の書画を蔵した。風流蘊藉で王謝の家風があったという。 宋史：巻255
- ・ 謝奕 ?-? 字は無奕。秣陵の人。官は安西將軍、予州刺史にまで至った。若いころから名声が高く、桓温と親しくした。従兄の謝尚が西州一帯をおさめた時、よい政治を行ったので、尚の死後、西州の人々はその徳政を慕い、縁のある奕が後についてくれることを願った。そこで朝廷は奕を都督予司冀并四州事に任じたという。 宣和書譜：巻7
- ・ 桓温 313-374 字は元子、譙国竜亢の人。官は丞相にまで至った。豪放にして、風貌も非常に雄々しく、英邁な気象を持っていたという。文武の才を併せ持つ。 晋書：巻98
- ・ 寶蒙 ?-? 扶風の人。字は子全。弟とともに書法に名がある。官は国子司業に至り、太原令を兼ねた。

<注・考>

- ・ 文徳化成  
文徳 学問・道徳。また礼楽による教化。武功と相對する言葉。『論語』季氏 「故遠人不服、則修文徳以来之。」  
化成 教化して立派なものに作り上げる。『易』恒 「聖人久於其道、而天下化成。」
- ・ 集入閣帖十巻 閣帖十巻とは淳化閣帖の事。<人名>太宗皇帝を参照。
- ・ 破爛 かびれたたれること。腐ること。またそれによって破損すること。 北宋・梅堯臣「觀何君寶画」詩 「昨日何家觀小軸、絹雖破爛色不渝。」
- ・ 上反… この前後から文章の意味が不明瞭になっている。

- ・ 寶蒙審定印 『歷代名画記』卷3に「議郎の寶蒙の印」と記載がある。

[3]

又黄素黄庭經一卷、是六朝人書。絹完、並無唐人氣格。縫有書印字、是曾入鍾紹京家。黄素縝密、上下是爲絲織成欄、其間用朱墨界行。卷末跋台僊二字、有陳氏圖書字印、及錢氏忠孝之家印。陶穀跋云、「山陰道士劉君、以群鵝獻右軍、乞書黄庭經、此是也。此書乃明州刺史李振景福中罷官過浚郊、遣光祿朱卿、卿名友文、即梁祖之子、後封博王、王薨、余獲于舊邸、時貞明庚辰秋也。晋都梁苑。因重背之。中書舍人陶穀記」。是日降制、以京兆尹安彦威兼副都統。余跋云、「書印字、唐越国公鍾紹京印也。晋史載、為寫道德經、當舉群鵝相贈。困李白詩送賀監云、鏡湖流水春始波、狂客扁舟逸興多。山陰道士如相見、應写黄庭換白鷺。世人遂以黄庭經爲換鵝經、甚可笑也。此名因開元後、世傳黄庭經多惡札、皆是偽作、唐人以画質猶爲非眞、則黄庭內多鍾法者、猶是好事者爲之耳」。

又有唐模右軍帖、雙鈎、蠟紙模。末後一帖、是「奉橘三百顆、霜未降、未可多得」。韋應物詩云、「書後欲題三百顆、洞庭更待滿林霜」、蓋用此事。開皇十八年三月二十七日、參軍學士諸葛穎、諮議參軍開府學士柳顧言、釋智果跋其尾。

<字句異同>

- ・ 縝密 拾遺「細密」に作る。
- ・ 爲絲織成欄 拾遺、王氏、說郭、四庫とも「爲」を「鳥」に作る。
- ・ 朱墨界行 拾遺「行」を欠く。
- ・ 台僊二字 四庫「台」を「合」に作り、拾遺「僊」を「仙」に作る。
- ・ 罷官 拾遺「官」を「任」に作る。
- ・ 博王 拾遺「博」を「博」に作る。
- ・ 書印字 拾遺「字」を「自」に作る。単なる誤植であろう。
- ・ 此名因開元後 拾遺「此名」の後に「蓋」がある。
- ・ 惡札 拾遺「札」を「本」に作る。
- ・ 猶爲非眞 四庫「爲」を「無」に作る。
- ・ 則黄庭內多 拾遺「黄庭」を「唐人」に作る。
- ・ 拾遺「又有唐模右軍帖」を別段に作る。
- ・ 雙鈎 拾遺「鈎」を「鈎」に作る。
- ・ 末後一帖 拾遺「後」を欠く。
- ・ 洞庭更待 拾遺「更」を「猶」に作る。
- ・ 蓋用此事 拾遺、この部分を欠く。
- ・ 參軍學士 拾遺「軍」と「學」の間に「事」がある。
- ・ 跋其尾 拾遺、この部分を欠く。

<人名>

- ・ 鍾紹京 ?-? 字は可大。虔州贛の人。魏の鍾繇の子孫といわれる。書を善くしたので、召されて鳳閣に奉仕し、武后朝において明堂の門額、九鼎の銘及び諸宮殿の門榜はみな、鍾紹京の筆になったという。中書侍郎、中書令を歴任し、越国公に封ぜられ、戸部尚書に昇進した。書画を嗜み、家には二王・褚遂良の真跡数百巻を蔵したといわれる。 旧唐書：巻97 新唐書：巻121
- ・ 陶穀 903-970 字は秀實、新平の人。本の姓は唐で、唐彦謙の孫。晋の諱を避けて改めたもの。後晋・後漢に仕え、後周に至って翰林學士・兵部侍郎となり、入宋して、禮刑戸三部の尚書を歴任した。強記にして学を嗜み、広く經史に通じた。開寶3年に年68で卒した。 宋史：巻269
- ・ 李振 ?-423 字は興緒。昭宗の殺害や朱友恭の謀略など、唐末の謀はすべて李振の謀略であったといわれる。また後梁の太祖が宦官勢力を一掃したのも李振の助言によったと見られる。官は戸部尚書に至った。唐の莊宗が梁を滅ぼすと、誅せられた。 旧五代史：巻18 新五代史：巻43
- ・ 朱友文 ?-? 梁太祖の養子。字は徳明。学を好み、よく談論をしたという。太祖の即位後は博王に封ぜられた。太祖が病気になり、朱友文が召し出された時に、朱友珪は太祖を殺し、友珪はその罪を友文にさせて殺した。 新五代史：巻13
- ・ 梁祖 907-923 後梁の太祖。姓は朱、名は温。初め、黄巢に従って盗みを働いていたが、後に唐に降りた。横暴をきわめていた宦官勢力を一掃し、清流を誇った貴族官僚を黄河の獨流に投じた。唐の昭宗を殺害して次に即位した哀帝に迫って梁を建国。更に名を晃と改めた。最後は朱友珪に殺された。 新五代史：巻1、2
- ・ 安彦威 ?-? 字は国俊。善く兵法を知っていたとされる。初めは後唐に仕えていたが、入晋して北京留守を拝した。官は西京留守、北面行營副都統などを歴任した。 旧五代史：巻91 新五代史：巻47
- ・ 韋應物 737-804? 京兆の人。詩に工で、性は高潔であったという。官は比部員外郎、左司郎中、蘇州刺史などを歴任した。その詩は閑澹簡遠、人はこれを陶淵明と比して、陶韋と称された。『韋蘇州集』がある。 唐才子傳：巻4
- ・ 諸葛穎 536-612 建康の人。字は漢。8歳にして文章を善くしたという。初めは梁に仕えていたが、侯景の乱で齊に逃げ込み、煬帝が即位したときに、著作郎となった。『鸞駕北巡記』『幸江都道里記』『洛陽古今記』『馬名録』及び文集がある。 隋書：巻76
- ・ 柳顧言 不詳
- ・ 釋智果 ?-? 僧。会稽の人。頗る文学を愛し、善く書をした。
- ・ 陳台僊 不詳
- ・ 錢勰 1034-1097 字は穆父、錢塘の人。五歳の時に、日に千言を暗誦したという。恩蔭で尉氏縣の知となった。翰林學士、池州の知を歴任し、紹聖4年に年64で卒した。錢勰は、蔵書に甚だ

富み、行草を工にしたという。 宋史：卷317

<注・考>

- ・ 氣格 詩文の気韻と風格を指す。 唐・皎然『詩式』卷1 「語與興驅、勢逐情起、作不由意、氣格自高。」
- ・ 黄素 黄色い絹。 晋・葛洪『神仙傳』陽長生 「能知神丹、久視長安。於是陰君裂黄素、寫丹經。」
- ・ 縝密 織り目が細かく、行き届いていること。 『禮記』聘義 「縝密以栗、知也。」 鄭玄注「縝、緻也。」
- ・ 烏絲織成欄 織成の織り方でおりこんだ黒色の罫（中田注P39）。
- ・ 界行 紙或いは絹上の行を区切る直線のこと。
- ・ 書印 『歴代名画記』卷3に「光祿大夫・中書令・上柱国・趙国公鍾紹京の印」とある。
- ・ 錢氏忠孝之家印 錢氏は錢勰の事を指す（中田注P39）。
- ・ 貞明庚辰秋 後梁末帝6年、920年。
- ・ 『晋史』載… 『晋書』卷80・王羲之傳には以下のような記事がある。「性愛鵝、會稽有孤居姥養一鵝、善鳴、求市未能得、遂攜親友命駕就觀。姥聞羲之將至、烹以待之、羲之歎惜彌日。又山陰有一道士、養好鵝、羲之往觀焉、意甚悅、固求市之。道士云「為寫道德經、當舉群鵝相贈耳。羲之欣然寫畢、籠鵝而歸、甚以為樂。其任率如此。」
- ・ 李白詩 「賀賓客の越に帰るを送る詩」全唐詩：卷176
- ・ 換鵝經 『黄庭經』を指す。或いは『道德經』の事をいう。王羲之が嘗て鵝を交換して写したために、こう呼ばれる。 北宋・蘇舜欽「丹陽子高得逸少瘞鶴銘于焦山之下来求詩因作長句以寄」 「山陰不見換鵝經、京口今存瘞鶴銘。」
- ・ 道德經 『老子』を指す。 『史記』老子韓非列傳 「關令尹喜曰、子將隱矣、疆爲我著書。於是老子洒著書上下篇、言道德之意五千餘言而去。」 漢河上公作『老子章句』では、81章に分けて、前半の37章を『道經』とし、後半の44章を『德經』としている。このために『道德經』の名前がある。
- ・ 蠟紙 表面に蠟を塗った紙。 北宋・蘇軾「夜過舒堯文戲作」詩 「推門入室書縱横、蠟紙燈籠晃雲母。」
- ・ 韋應物詩 「答鄭騎曹青橘絶句（一に故人重九日求橘書中戲贈）」全唐詩：卷190（中田注P48）

[4]

晋右將軍會稽内史王羲之行書帖真跡、天下法書第二、右軍行書第一也。帖辭云、「羲之死罪。伏想朝廷清和、稚恭遂進鎮、東西齊舉、想尅定有期也。羲之死罪。長慶某年月日、太常少卿蕭祐鑑定」。在王珪禹玉家、後有禹玉跋、以門下省印印之。時貴多跋。後為章惇子厚借去不歸。其子仲脩、專遣介請未

至。是竹絲乾筆所書、鋒勢鬱勃、揮霍濃淡如雲煙、變怪多態。“清”字破損、余親臨得之。

<字句異同>

- ・ 後有禹玉跋 **拾遺**「有王跋」に作る。
- ・ 時貴多跋 **拾遺**「跋多」に作る。
- ・ 後爲章惇子厚借去 **拾遺**「後爲章惇所借」に作る。
- ・ 其子仲脩 **拾遺**、**說郛**「仲修」に作る。
- ・ 竹絲 **拾遺**「絲」を「紙」に作る。
- ・ 變怪多態 **拾遺**「多態」を欠く。

<人名>

- ・ 蕭祐 蘭陵の人。字は祐之。書画に詳しく、鑑識を善くしたという。
- ・ 王珪 1019－1085 字は禹玉、華陽の人。慶暦2年に進士となり、元豊5年には尚書左僕射となり、門下侍郎を兼任し、岐国公に封ぜられた。元豊8年に年68で卒した。諡は日文。『華陽集』がある。 宋史：卷312
- ・ 章惇 1035－1105 字は子厚、浦城の人。性は豪雋にして、博学で文を善くした。嘉祐4年に進士となった。王安石がその才を悦び、用いて編修三司條例官となり、哲宗の時に樞密院事の知となった。その党の人物を登用して、つとめて元祐の党人を排したために、怨みを集めた。徽宗皇帝の時、睦州に流され、崇寧4年に年71で卒した。 宋史：卷471
- ・ 王仲脩 ？－？ 華陽の人。王珪の子。元豊中に登第し、官は崇文院校書に至った。 東都事略：卷80 宋詩紀事：卷29

<注・考>

- ・ 竹絲乾筆  
竹絲 古代の紙の品種の一つ。 元・費著『蜀箋譜』「廣都紙有四色、一曰假山南、二曰假榮、三曰冉村、四曰竹絲、皆以楮皮爲之。」  
乾筆 枯れた筆。画法で水墨を究めて少なく含ませて画く筆法。 鮑昌『庚子風雲』第1部第18章 「或乾筆皴擦、或淡墨暈染、或焦墨破醒、模糊蒼郁、蔚爲一代画風。」
- ・ 鬱勃 氣勢が旺盛で充滿していること 『鬼谷子』權篇 「怒者妄動而不治也。」南朝梁・陶弘景注「怒者鬱勃、故妄動而言不治也。」
- ・ 揮霍 奔放で、さっぱりしていること。また俗気がないこと。 明・方孝孺『關王廟碑』「是氣也、得其靈奇盛著則爲偉人。當其生乎時、揮霍宇宙、頓挫萬類、叱雷噫風、雄視乎舉世、故發而爲忠毅之業。」
- ・ 變怪 奇異で変化の多いこと。 明・王鏊『震澤長語』文章 「蓋昌黎爲文主於奇、馬遷之變怪、相如之闕放、揚雄之刻深、皆善出奇。」
- ・ 多態とは前の文章をうけて、字の「態」が変化に富んでいることを表現したのであろう。「態」と

いうと、『海岳名言』の次の言葉を思い起こすことができる。「變態貴形、不貴苦。苦生怒、怒生  
恢。貴形不貴形。作入畫、畫入俗。皆字病也」。米芾は王獻之を良く学んで一家を成したと言わ  
れるが（『山谷題跋』巻4「米芾元章、專治中令書。皆以意附會、解説成理」。）、この文章は、い  
かに米芾が王羲之から学んでいるものが多いかを示す一端になろう（ここでは文献からの指摘で  
あるが、技法的な面での指摘には、「米元章の三帖について」P141～142『西川寧著作集』二玄  
社・1991年がある）。

・ 余親臨得之

「稚恭帖」はわずか29文字。それを米芾は「余親臨得之」と言っている。米芾のこうした日常の  
態度、北宋の文人の雰囲気を理解するのに、次の文章が役に立つであろう。「藏書務多、而不精  
別。此近世士大夫所同病。唐彦猷得歐陽率更書數行、精思學之。彦猷遂以書名天下。近世榮咨道  
費千金、聚天下奇書。家雖有國色之姝、然好色不如好書也。而榮君翰墨、居世不能入中品。以此  
觀之、在精而不在博也」。『山谷題跋』巻5「書模搨東坡書後」

[5]

王羲之玉潤帖、是唐人冷金紙上雙鉤・。帖云、「官奴小女玉潤、病来十餘日、了不令民知、昨来忽發  
痼、至今轉篤。又苦頭癰。頭癰已潰、尚未足憂、痼病少有差者、憂之焦心、良不可言。頃者艱疾未之  
有、良由民為家長、不能克己勤修、訓化上下、多犯科誡、以至於此。民惟婦誠待罪而已。此非復常言  
常辭、想官奴辭已具、不復多白。上負道德、下愧先生、夫復何言」。此帖連在稚恭帖後、字大小一如蘭  
亭、想其真蹟神妙。右軍快雪時晴帖云、「羲之頓首。快雪時晴、佳。想安善。未果、為結力不次。王羲  
之頓首。山陰張侯」。是真字、數字帶行、今世無右軍真字帖。未有君倩二字、疑是梁秀。縫有褚氏字印、  
是褚令所印。蘇氏有三本、在諸房、一余易得之、一劉涇巨濟易得、無褚印。

<字句異同>

- ・ 雙鉤模帖 拾遺「帖」を欠く。
- ・ 頭癰。頭癰 拾遺 二番目の「頭」を欠く。
- ・ 尚未足 拾遺「未」を「不」に作る。
- ・ 痼病 拾遺「病」を「疾」に作る。
- ・ 不能克 拾遺「克」を「剋」に作る。
- ・ 勤修 拾遺「修」を「脩」に作る。
- ・ 已具 拾遺「已」を「以」に作る。
- ・ 此帖連在 拾遺「此帖」を欠く。
- ・ 神妙 拾遺「神」を「之」に作る。
- ・ 拾遺 「右軍快雪時晴帖」を別段に作る。
- ・ 是真字 拾遺、この部分を欠く。

- ・ 余易得之 **拾遺**「之」を欠く。

<人名>

- ・ 劉涇 ？-？ 字は巨濟、前溪と号した。簡州陽安の人。熙寧6年に進士となり、王安石がその才を推薦した。元符の末に官は職方郎中に至った。文章を作るに、つとめて奇詭にしたという。年58で卒した。『前溪集』5巻が著書にあるが、伝わらない。 宋史：巻443
- ・ 梁秀 [1] <人名>を参照。ここでは「君倩」という押署は梁秀のものであるとしている。

<注・考>

- ・ 冷金紙 白色を帯びた泥金、或いは金をまぶした紙。
- ・ 文章の内容を現存の帖に校合すると、「已潰」の「已」が「以」、「未足」の「未」が「不」、「克已」の「克」が「剋」、「勤修」の「勤」が「勲」、「已具」の「已」が「以」となる。

[6]

晋太宰中書令王獻之字子敬十二月帖、黄麻紙、辞云、「十二月割至否。中秋不復、不得想、未復還働、理為即甚省、如何。然勝人何慶等、慶等大軍」。下一印曰「鐸書」、是唐相王鐸印。後有君倩字、前有絹小帖、是褚遂良、題曰「大令十二月帖」。此帖運筆如火筋畫灰、連屬無端末、如不經意、所謂一筆書。天下子敬第一帖也。元與快雪帖相連、蘇太簡家物、上有国老・才翁・子美題跋、云「鹵僧守一所藏、先令以命服得之」。子美子激、字志東、與余分藏、以書畫寶玩易之。

<字句異同>

- ・ 太宰 **王氏**「宰」を「常」に作る。
- ・ **拾遺**ではこの則が欠落している。

<人名>

- ・ 王獻之 344-388 字は子敬。瑯邪臨沂の人。王羲之の第7子。官は中書令にまで至った。諡は憲。父とともに二王と呼ばれ、父を大王、獻之を小王と呼ぶ。逸気にすぐれた書風を創り出し、南朝初期の士大夫の間に流行した。 晋書：巻80
- ・ 王鐸 ？-884 字は昭範。會昌年間に進士となり、同中書門下平章事、司徒を歴任し、後に僖宗とともに入蜀し、侍中を加えられた。 新唐書：巻185 旧唐書：巻164
- ・ 蘇易簡 958-996 字は太簡、桐山の人。太平興国5年に進士の第一となる。文章をもって名が知られ、翰林学士承旨に累官した。至道2年に年39で卒し、礼部尚書を贈られる。易簡は酒を非常に好んだという。『文房譜』、『續翰林志』及び文集20巻がある。 宋史：巻266
- ・ 蘇耆 987-1035 字は国老、銅山の人。蘇易簡の子。官は開封縣の知、三司判官、尚書祠部員外郎、明州の知、京西轉運使、工部郎中などを歴任した。景祐2年正月に年49で卒した。『著計録』3篇、『開談録』5巻、『次翰林志』、『續文房四譜』並びに文集20巻がある。 宋史：巻266
- ・ 蘇舜元 1006-1054 字は才翁、銅山の人。蘇耆の長男。太常博士、尚書祠部員外郎、三司度支

判官を歴任した。至和元年に年49で卒した。草書を能くしたという。『奏御集』10巻、『塞垣近事』2巻、文集10巻がある。 宋史：卷442

- ・ 蘇舜欽 1008－1048 字は子美、銅山の人。舜元の弟。若くして慷慨、大志があったという。進士となり、大理評事となった。范仲淹がその才を薦め、集賢校理、監進奏院となる。時に歌詩に発憤し、その体は豪放で、往々にして人を驚かせた。善く草書をした。慶暦8年12月に年41で卒した。『蘇学士集』がある。 宋史：卷442
- ・ 鹵僧守一 不詳
- ・ 蘇激 不詳

<注・考>

- ・ 君倩字 [5] <人名>梁秀の項を参照。
- ・ 火筋畫灰…如不經意、所謂一筆書。 不經意とは意（こころ）を経ずにとという意味であろう。王献之のこの帖を、米芾はこのように表現したのであろう。
- ・ 先令以命服得之 先令は蘇易簡を指すと思われる（中田注：P65）。  
命服 諸侯が爵位とともに天子から受ける位階相当の官服。 『詩経』小雅・采芑「服其命服、朱芾斯皇。」鄭玄箋「命服者、命爲將、受王命之服也。」

[7]

王羲之の筆精帖、内兩字集在諸家碑上、縫有正觀半印。王献之日寒帖、有唐氏雜跡印、後有兩行謝安批、所謂批後為答也。唐太宗不敬献之慰問帖、故於帖上刮去不次献之白字、謂之羊欣以應募、而以前帖為薄紹之書。跋尾書官姓名、云「大歷某年月日」、下刮去古姓名。五代人題曰、「薛邕記之」。後題一行曰、「某年和傳遺余」。押字是薛丞相居正。此是和凝丞相改為薛氏故物以遺薛也、其後歸王文惠家。文惠孫居高郵、並收得褚遂良黃絹上臨蘭亭一本。乏賞之官、許余以五十千質之。余時遷葬丹徒、約王君、友婿宗室時監羅務今輒亦欲往、別約至彼交帖。王君後余五日至、余方襄大事、未暇見之。事竟見、云「適沈存中借去」。吾拊髀驚曰、「此書不復歸矣」。余遂過沈、問焉。沈曰「且勿驚破得之、當易公王維雪圖、其父嘗許見與也」。余困不復言。後數日、王君携褚書見過、大歎曰、「沈使其婿以二十星資其行、請以二十千留褚書」。余因不復取。後十年、王君卒、其子居高郵、欲成姻事、因賀鑄持至儀真、求以二十千售之、後蘇頌丞相家與沈之子博毅同曾、問所在、曰「分與其弟矣」。翌日、蘇舜元子云、「屢見之」。

<字句異同>

- ・ 正觀 「正」は「貞」で、これは宋の諱を避けたものである。王氏、説郭は「正」に作り、四庫は「貞」に作る。
- ・ 太宗不敬献之慰問帖 拾遺「太宗不収献之帖、而収雜帖」に作る。四庫「敬」を「収」に作る。
- ・ 白字 四庫「白」を「四」に作る。

- ・ 和傳 **王氏**、**說郛**、**四庫**「傳」を「傳」に作る。
- ・ 此是和凝 **拾遺**「是」を「即」に作る。
- ・ 改爲 **四庫**、**拾遺**「改」を「疑」に作る。
- ・ 余時遷葬 **拾遺**「遷」を「迂」に作る。
- ・ 宗室時監羅務 **拾遺**「時」を欠く。
- ・ 往別約至 **拾遺**「約」を欠く。
- ・ 彼交帖 **拾遺**「帖」を欠く。
- ・ 未暇見之 **拾遺**、この部分を欠く。
- ・ 適沈存中 **拾遺**「沈存中適」に作る。
- ・ 此書不復歸 **拾遺**「此」を欠く。
- ・ 求以二十千 **拾遺**「求」を「請」に作り、「千」を「六」に作る。
- ・ 沈之子 **拾遺**「之」を「公」に作る。
- ・ 分與其弟矣 **拾遺**「矣」を欠く。
- ・ 蘇舜元子云 **拾遺**「子」を欠く。

<人名>

- ・ 太宗 598－649 李世民。唐朝第二代の皇帝。聡明で決断力に富み、教養ある政治家として内治、外征にすぐれた手腕をみせ、いわゆる貞観の治を築いて国力を充実させた。王羲之の書を熱愛して、虞世南・歐陽詢・褚遂良を重用し、貞観年間には王書を中心とした法書の収集整理作業を行った。 旧唐書：巻2，3 新唐書：巻2
- ・ 羊欣 370－442 字は敬元。泰山南城の人。官は宋の時、新安太守に至った。経籍を広く学んだといわれる。書は王献之について学んだという。著書に『古来能書人名』がある。 宋書：巻62
- ・ 薄紹之 ？－？ 字は敬叔、丹陽の人。官は給事に至った。書は王献之を学んだとされ、特に行草では時に羊欣を越えたという。 宣和書譜：巻16
- ・ 薛居正 912－981 字は子平、開封浚儀の人。若くして学を好み、大志があった。南唐の清泰の時に登第し、乾徳の時に初めて兵部侍郎に官した。参知政事の時に五代史を監修し、平章事に昇進した。太平興国の初めに司空に進み、同6年に卒した。年は70で、諡は文惠。 宋史：巻264
- ・ 和凝 898－955 後周、須昌の人。字は成績。梁の時進士となり、晋・漢に仕えて、官は左僕射、太子太傅に至り、魯国公に封ぜられる。『疑獄集』がある。 新五代史：巻56 旧五代史：巻127
- ・ 王會 978－1038 字は孝先、青州益都の人。官は中書侍郎、同中書門下平章事を歴任し、沂国公に封ぜられた。寶元元年に年61で卒した。諡は文正。『王文正公筆録』がある。 宋史：巻310
- ・ 王景融 不詳
- ・ 宗室時監羅務今輓 不詳
- ・ 沈括 1029－1093 字は存中、錢塘の人。嘉祐8年に進士となり太子中允、提舉司天監、太常丞、

翰林学士などを歴任した。博学にして文を善くし、天文方志律曆音楽医薬卜算、全てに通じたという。『長興集』『夢溪筆談』『蘇沈良方』がある。 宋史：巻331

- ・ 賀铸 1052－1125 字は方回、衛州の人。身長7尺、顔は鉄色の如く、眉目は高く聳えて抜きん出ていたという。俗にこれを賀鬼頭と言った。元祐中、通直郎、通判泗州、倅太平州となる。博学強記、語言に工で、最も制曲に長じたという。蔵書数万巻、自ら書籍を校訂して、一字も誤りが無かったという。慶湖遺老と号した。宣和7年に年74で卒した。『東山楽府』・『慶湖遺老集』20巻がある（後者は伝わらず）。 宋史：巻443
- ・ 蘇頌 1020－1101 字は子容、泉州の人。慶暦2年に進士となり、集賢校理となる。元祐中に右僕射を拝し、中書侍郎を兼任した。建中靖国元年5月に年82で卒した。司空を贈られる。『華戎魯衛信録』250巻、『注本草』、『蘇魏公集』72巻などがある。 宋史：巻340
- ・ 沈博毅 不詳
- ・ 蘇舜元 [6] <人名>を参照
- ・ 王随 不詳
- ・ 王景昌 不詳

#### <注・考>

- ・ 遷葬 特に成人の独身の者で、生きている間は夫婦ではなかったが、死んで後に、一緒に埋葬して姻戚関係を結ぶこと。『周禮・地官・媒氏』「禁遷葬者與嫁殤者。」鄭玄注「遷葬、謂生時非夫婦、死既葬、遷之、使相從也。」後に、元々の葬地より棺を別の一地方に移して埋葬することを言うようになった。
- ・ 友壻 『漢書』嚴助傳 「助侍燕從客、上問助居鄉里時、助對曰、家貧、爲友壻富人所辱。」顏師古注「友壻、同門之壻。」
- ・ 拊髀 手を以って股をうつこと。激動、賞賛等の心情を表示すること。『漢書』馮唐傳 「上既聞廉頗、李牧爲人、良說、乃拊髀曰、嗟乎、吾獨不得廉頗、李牧爲將、豈憂匈奴哉。」
- ・ 驚破 驚かす、びっくりさせる。宋・范成大「次韵陳融甫支塩年家見贈」「高軒款門来、驚破雀羅静」
- ・ 『寶晋齋法書贊』巻20「米元章臨筆精日寒二帖・行書十三行」の岳珂の文には、この帖が米芾が初めて見た晋帖であるという指摘があるが、その根拠は明らかではない。
- ・ この文章は中田氏が指摘するとおり、不明瞭な部分がある。特に『寶章待訪録』とは矛盾するようである。以下『寶章待訪録』より同じ部分を抜粋して示す。私見では、『寶章待訪録』を正確なものを見たほうが良いと判断する。

「王右軍紙妙筆精帖、有貞觀印。王大令日寒帖、有唐氏雜跡印。爲故相王曾家物。在其孫景融處。後爲前龍圖待制沈括存中取之。古跋右軍作羊欣、大令作薄紹之。仍將大中歲跋刮去、去數字、填爲薛邕記之、而故相薛居正題曰、和傳遺余。此蓋和凝爲薛氏故物。歸居正耳。唐太宗雅不喜子敬

書。故時人以他名名之、以應募。所謂紹之書白、乃于耳字下刮去及不次獻之頓首字。猶在一分許可識。大中所跋既不能辨、復為不鑑之人所収、遂使至寶永失其真。殊可痛也」。(中田注：P 51、52参照)

「宋羊欣宋翼二帖、并楮遂良模蘭亭。見中書舍人蘇軾云、在故相王隨之孫景昌處。撫石在湖州墨妙亭、屢見石本。今在沈存中括家」。(中田注：P 43、44参照)

## [ 8 ]

王獻之送梨帖云、「今送梨三百顆、晚雪殊不能佳」。上有梨幹黎氏印、所謂南方君子者。跋尾半幅云、「因太宗書卷首見、此兩行十字、遂連此卷末、若殊還合浦、劍入延平。大和三年三月十日、司封員外郎柳公權記」。後細題一行曰、「又一帖十二字連之」。余辨乃右軍書、云「思言叙、卒何期、但有長歎、念告」。公權誤以為子敬也。縫有正觀半印、世南孝先字跋、孝先是本朝王曾丞相字。劉季孫以一千置得。余約歐陽詢真跡二帖、王維雪圖六幅、正透犀帶一條、硯山一枚、玉座珊瑚一枝以易、劉見許。王誥借余硯山去、不即還。劉為澤守、行兩日、王始見還。約再見易、而劉死矣。其子以二十千賣與王防。唐太宗書竊類子敬、公權能於太宗書卷辨出、而復誤連右軍帖為子敬、公權知書者、乃如此。其跋馮氏西昇經、唐經生書也、乃謂之褚書同也。蓋能書者、未必能鑑。余既跋定之、蘇子瞻於是跋詩曰、「家鷄野鷺同登俎、春蚓秋蛇總入筐。君家兩行十二字、氣壓鄴侯三萬籤」。蓋以晋史太宗贊貶子敬也。然唐太宗力學右軍、不能至、復學虞行書、欲上攀右軍、故大罵子敬耳。子敬天真超逸、豈父可比也。

### <字句異同>

- ・ 三百顆 **拾遺**「顆」を欠く
- ・ 跋尾 **拾遺**「尾」を「紙」に作る。
- ・ 劍入 **拾遺**「入」を「反」に作る。
- ・ 大和 **說郛**、**四庫**「太和」に作る。
- ・ 珊瑚一枝 **拾遺**「枝」を「枚」に作る。
- ・ 劉見許 **拾遺**「見」を欠き、「許」の後に「矣」がある。
- ・ 約再見易 **拾遺**「易」の次に「之」がある。
- ・ 而復誤 **拾遺**「而」を欠く。
- ・ 唐經生書也 **拾遺**「唐經」「也」を欠く。
- ・ 褚書、同也 **四庫**「同」を「非」に作る。
- ・ **拾遺**「余既定之…」以下脱文。

### <人名>

- ・ 王曾 [ 7 ] <人名>を参照
- ・ 劉季孫 ?-?字は景文、開封祥符の人。志篤く、つとめて学問をした。詩文に工であったという。卒した時、家には余財なく、ただ書3万軸、画数百軸のみであったという。 東都事略：卷110

宋詩紀事：卷30

- ・ 王防 不詳
- ・ 馮京 1021－1094 字は當世、江夏の人。皇祐元年に進士となる。翰林学士を拝し、開封府の知となる。太子少師を以って官を辞した。紹聖元年に年74で卒して、司徒を贈られる。諡は文簡。『瀟山集』がある。 宋史：卷317
- ・ 黎幹 ？－？ 戎州の人。天文に詳しかったという。諫議大夫、京兆尹などを歴任した。

<注・考>

- ・ 梨幹黎氏印 『歷代名画記』卷3に「故御史大夫黎幹の印」として「黎氏」という印を記載している。
- ・ 蘇軾詩 『東坡集』卷18「書劉景文所藏王子敬帖絕句」（中田注P67）
- ・ 『晋史』太宗贊貶子敬也 『晋書』卷80「王羲之傳」の太宗の贊には次のようにある。「獻之雖有父風、殊非新巧。觀其字勢疏瘦、如隆冬之枯樹。覽其筆蹤拘束、若嚴家之餓隸。其枯樹也、雖槎 而無屈伸。其餓隸也、則羈羸而不放縱。兼斯二者、故翰墨之病歟」。ここでは必要以上と思われるほど、王獻之が酷評されている。
- ・ 天真超逸  
天真 『莊子』漁父 「禮者、世俗之所爲也。眞者、所以受於天也、自然不可易也。故聖人法天貴眞、不拘於俗。」後に「天真」という言葉は礼俗の拘束を受けない品性を指すようになった。『晋書』阮籍嵇康等傳論 「餐和履順、以保天真。」 北宋・范仲淹「依韵答提刑張太傅嘗新醞」「大言出物表、本性還天真。」 蘇軾『東坡題跋』卷4「書張長史草書」「張長史草書、必俟醉、或以爲奇、醒即天真不全。」 歐陽修『筆説』「李晟筆説」「古人各自爲書、用法同而字異、然後能名於後世。若夫求悦俗以取媚茲、豈復有天真耶。唐所謂歐・虞・褚・陸至於顔・柳、皆自名家。蓋各因其性。則爲之亦不爲難矣」。ここでは便宜上、天真を「内（面）的生命」とでも訳しておく。米芾の書論の中でも、この一節は非常に有名である。
- ・ 馮氏西昇經 『書史』の66段に次のような文がある。「老子西昇經、裴度柳公權跋爲褚公書。與閣立本書圖在馮當世家。吾見之、皆非也。是唐初書畫。與柳跋是眞迹、二君亦不能鑑耳。」

[9]

王羲之來戲帖、黄麻紙、字法清潤、是少年所書、滿一幅、其間數字難辨、六朝寫經、編字注之、後人復以雌黄塗蓋、歲久膠落、字見五分。在丁晋公孫受繪像恩澤者房下、云「晋公故物也」。欲以二十千見歸、余即以其直取君、以與余來往議。此粘書帖於後、質於其鄰大姓賈氏、得二十千、蓋意其可贖也。今十五年矣、猶在賈氏。曾經人用薄紙搨書、墨即透數行、仍汚静地、深可歎息。其家又有韓擇木八分一卷、唐人薄紙、五帖一幅。

<字句異同>

- ・ 清潤 拾遺「潤」を「閏」に作る。
- ・ 恩澤 拾遺「澤」を欠く。
- ・ 此帖書粘帖 拾遺「此」「書」を欠く。
- ・ 可贖也 拾遺「也」を欠く。
- ・ 墨即透數行 拾遺「即」を「印」に作る。
- ・ 静地 拾遺「静」を「淨」に作る。
- ・ 五帖 拾遺「五」を「王」に作る。

<人名>

- ・ 丁謂 966－1037 字は謂之、後に字を公言と改めた。長洲縣の人。淳化3年に進士となり、同中書門下平章事、昭文館大學士を歴任して、晋国公に封ぜられる。景祐4年に光州で卒した。年72。談笑を喜び、最も詩を作る時に喜んだという。図画博奕音律、極めないものはないという。宋史：卷283
- ・ 丁景 不詳
- ・ 大姓賈氏 不詳
- ・ 韓擇木 ？－？ 昌黎の人。官は右騎常侍、工部尚書を拝し、宝応元年（762）太子太保を兼ねて官を辞した。書は八分を善くしたといわれる。述書賦並注 宣和書譜：卷2

<注・考>

- ・ 来戲帖 この帖が如何なるものかは不詳だが、今も真蹟として伝わる「翰牘九帖」の第1帖には、来戲帖の事を言っていると思われる文章があるので、以下に抜粹する。  
「面諭漸幹。具如後。恐公忙託鼎承。長洲縣西寺前。僧正寶月大師。収翟院山水兩幀。第二幀上。一秀才跨馬。元要五千賣。只著三千。後來寶月五千買了。如肯輟元直上增數千買取。蘇州州衙前。西南上。丁承 是晋公繪像恩澤 務家秀才。丞相孫 新自京師出来。有草書一紙。黃紙玉軸。問道有數小真字。注不識草字。末有来戲。二字。向要十五千。只著他十千。遂不成。今知在。如十五千肯告。買取。更增三二千不妨」。
- ・ 雌黄 鈹物の名前。有毒で、よく殺菌し虫を滅らす。またそれを利用して作った顔料。古人が黄紙を用いて字を写している時に、誤った場合それを上から塗って後に写しかえる。北宋・沈括『夢溪筆談』故事一 「館閣新書浄本有誤書處、以雌黄塗之……惟雌黄一漫則滅、仍久而不脱。」
- ・ 静地 文字の周辺の白い紙の部分（中田注：P53）
- ・ 『寶章待訪録』の文章は以下の通り。  
「逸少来戲帖、麻紙上。六朝人所臨寫、旁注小真字、數枚復以雌黄覆之。在蘇州故相丁謂孫景處後。以一萬質于鄆州梁子志處。故相梁適孫也。又有唐雙鈎撫帖、亦在丁景處。某皆有題跋」。

[10]

王羲之桓公破羌帖、有開元印、唐懷充跋、「筆法入神」。在蘇之純家。之純卒、其家定直、久許見歸、而余使西京未還、宗室仲爰力取之、且要約曰、「米芾、有其直見歸、即還」。余遂典衣以增其直取回。仲爰已使庸工裝背剪損、古跋尾參差矣。痛惜痛惜。

<字句異同>

- ・ 有開元印 **拾遺** この部分の次に「梁書證」がある。その次の「唐」を欠く。
- ・ 久許見歸 **拾遺** 「見」を欠く。
- ・ 而余使 **拾遺** 「而」を「余」と誤植している。
- ・ 宗室仲爰 **拾遺** 「宗室」を欠く。
- ・ 有其直見 **拾遺** 「有」を「即以」と作る。
- ・ 庸工裝背剪損 **拾遺** 「庸工剪背」に作る。
- ・ 古跋尾 **拾遺** 「尾」を欠く。

<人名>

- ・ 懷充 不詳だが、『歴代名画記』巻3の「古よりの跋尾と押署を叙ぶ」の梁の時代の項に、唐懷充という名が記載されている。
- ・ 蘇之純 不詳
- ・ 趙仲爰 1054－1123 字は不詳。徽宗皇帝が即位すると建武軍節度使を拝し、少傅に至った。宣和5年に年70で卒した。太保を贈られ、恭王に封じられた。 宋史：巻245

<注・考>

- ・ 開元印 [1] 注を参照
- ・ 典衣 衣服を質に入れること。 唐・杜甫「曲江」詩之二 「朝回日日典春衣、每日江頭盡醉歸。」後にまた飲酒を指すようにもなった。

[11]

王右軍筆陣圖、前有自寫眞、紙緊薄如金葉、索索有聲。趙竦得之于一道人、章惇借去不歸。王右軍書家譜、在山陰縣王氏。右軍東方朔畫贊、糜破處歐陽詢補之、在丁諷學士家、歸宗室令時、劉涇以僧繇畫梁武帝像易去。

<字句異同>

- ・ 王右軍筆陣圖 **拾遺** 「王」を欠く。
- ・ 不歸 **拾遺** 「不」を「未」に作る。
- ・ **拾遺**、「王右軍書家譜」を別段に作る。また次の「王右軍東方朔畫贊」も別段に作り、「東」字を欠く。
- ・ 在丁諷學士 **拾遺** 「在」を「自」に作る。

- ・ 易去 **説郭**「去」を「云」に作る。

<人名>

- ・ 趙竦 不詳
- ・ 章惇 [4] <人名>を参照
- ・ 山陰県王氏 不詳
- ・ 丁諷 ?-? 字は不明。祥符の人。官は集賢校理まで至った。 宋史：卷292
- ・ 趙令時 1061—1134 字は德麟。元祐の名流と多く交流し、後に高宗の南渡に従った。官は洪州観察使、寧遠軍承宣使など。安定郡王に封ぜられる。紹興4年に年74で卒した。著書に『侯鯖録』8巻・『采録故事詩話』がある。 宋史：卷244

<注・考>

- ・ 寫眞 肖像画のこと。北宋・王安石「胡笳十八拍」之八 「死生難有却回身、不忍重看舊寫眞。」
- ・ 金葉 黄金をうって作った薄片。 『宋史』卓行傳・徐積 「嘗借人書筴、經宿還之、借者給言中有金葉、積謝而不辨、賣衣償之。」
- ・ 筆陣圖 孫過庭『書譜』には、王羲之の『筆陣図』を記載しているが、今伝わるものは『衛夫人筆陣図』である。また『歴代名画記』巻5の王羲之の条の注には「臨鏡自寫眞」があり、自寫眞とはこれに基づくと思われる（以上中田注：P48）。但し『寶晋英光集』巻 には次の文章がある。「趙子立収筆陣圖。前有右軍眞蹟、並筆様手勢圖。後為章子厚取之、使吳匠製甚入用。今吳有其遺製。近知此書、在章持房下。」これによると、米芾はやはり王羲之の『筆陣図』を見たことになる。また趙竦が趙子立になっており、更に「自寫眞」が「前有右軍眞蹟」となっており、どちらが正しいのかは決め難い。

[12]

樂毅論智永跋云、「梁世・出、天下珍之。其間書誤兩字、遂以雌黃治定、然後用筆」。今世無此改誤兩字本流。傳余於杭州天竺僧處得一本、上有改誤兩字、又不闕唐諱、是梁本也。

<字句異同>

- ・ 其間書誤 **拾遺**「其間」を「内」に作る。
- ・ 本流傳 **拾遺**「流傳」を欠く。

<人名>

- ・ 杭州天竺僧 不詳

<注・考>

- ・ 智永跋 『法書要録』巻2「智永題右軍樂毅論後」の事。文章は以下の通り。「樂毅論者正書第一梁世模出天下珍之自蕭阮之流莫不臨學陳天嘉中人得以獻文帝帝賜始興王作牧境中即以見示吾昔聞其妙今觀其眞閱翫良久匪朝伊夕始興薨後仍屬廢帝廢帝既歿又屬餘杭公主公主以帝王所重恆

加寶愛陳世諸王皆求不得及天下一統四海同文處處迫尋累載方得此書留意運工特盡神妙其間書誤兩字不欲點除遂雌黃治定然後用筆陶隱居云大雅吟樂毅論太師箴等筆力鮮媚紙墨精新斯言得之矣釋智永記」

[13]

晋庾翼稚恭真跡、在張丞相齋賢孫直清汝欽家。古黃麻紙、全幅無端末、筆勢細弱、字相連屬、古雅。論兵事、有数翼字。上有寶蒙審定印、後連張芝・王・草帖、是唐人偽作。薰紙、上深下淡、筆勢俗甚、語言無倫、遂使至寶、雜於瓦礫、可歎。余屢言與汝欽、不肯拆也。

<字句異同>

- ・ 直清汝欽家 拾遺「汝欽」を欠く。
- ・ 字相連屬 拾遺「相」を欠く。
- ・ 筆勢俗甚 拾遺「勢」を「氣」に作る。
- ・ 余屢言與汝欽 拾遺「余」を欠き、「與」を「於」に作る。

<人名>

- ・ 庾翼 305-345 字は稚恭、潁州鄆陵の人。官は安西將軍、荊州刺史に至り、死後車騎將軍を贈られた。諡は肅。 晋書：卷73
- ・ 張芝 ?-190~193 字は伯英、敦煌酒泉の人。若くして高操があつたが、終生仕官せず、潔白の士として世を終わった。草書の名手として知られる。 後漢書：卷55
- ・ 王・ 267-322 字は世將、瑯邪臨沂の人。平南將軍、荊州刺史を歴任し、死後侍中を贈られた。諡は康。詩文、書画、音楽、射御、博奕、雑伎に通じたという。 晋書：卷76
- ・ 張齋賢 943-1014 字は師亮、曹州冤句の人。真宗皇帝の時、官は兵部尚書、同中書門下平章事に至り、司空を以って官を辞した。齊賢の議論は慷慨にして大略があり、刑罰に心を留めたという。大中祥符7年に年72で卒した。諡は文定。『洛陽縉紳舊聞記』1巻がある。 宋史：卷265
- ・ 張直清 張齊賢の子と記されているが、不詳である。

<注・考>

- ・ 古雅 古く素朴で、上品・風流な趣があること。 唐・高彦休『闕史』裴晋公大度 「皇甫郎中湜、氣貌剛質、爲文古雅、恃才傲物。」
- ・ 全幅無端末 紙の継ぎ目の無い事か（中田注：P75）。

[14]

濮州李丞相家多書畫、其孫直秘閣李孝廣收右軍黃麻紙十餘帖、一樣連成卷。字老而逸、暮年書也。略記其数帖辭、一云「白石枕殊佳物、深感卿至」。一云「卿事時了、甚快。群凶日夕云云、此使鄴下一日爲戰場、極令人惆悵、豈復有慶年之樂耶、思卿一面、無緣、可歎可歎」。一云「九日以當力見」。一

云「重熙八日過信安」。一云「祠物當治護、信到便遣來、忽忽善錯也」。一云「謝書云云、今途」。一云「鶻等不佳、令人弊見此輩。吾衰老、不復堪此」。餘不記也。後有先君名印、下一印曰「尊德樂道」。今印見在余家。先君嘗官濮、與李柬之少師以碁友善、意其奕勝之、余時未生。此帖一卷、世未見比、故是右軍名札也。又歐陽詢故事十餘帖、老筆相連、其子通書評書一卷、張顛絹帖一卷、七八帖乃少時書。並在李孝廣處。

<字句異同>

- ・ 李孝廣 **拾遺** この次に「處」がある。
- ・ 一樣連成 **拾遺** 「連」を欠く。
- ・ 字老而逸 **拾遺** 「而」を欠く。
- ・ 無縁 **拾遺** 「無由縁」に作る。
- ・ 此使鄴下 **四庫** 「此」を「比」に作る。
- ・ 八日 **拾遺** 「八月」に作る。
- ・ 鶻等不佳 **拾遺** この次にまた「不佳」を繰り返す。
- ・ 先君名印 **拾遺** 「君」を「公」に作る。
- ・ 李柬之 **拾遺** 「李簡之」に作る。
- ・ 右軍名札也 **拾遺** 「名札」を「合作」に作る。**四庫** 「札」を「札」に作る。
- ・ 老筆相連 **拾遺** 「相連」を欠く。

<人名>

- ・ 李迪 971—1047 字は復古。先祖は趙郡の人であるが、後に幽州に遷り、また濮州に遷った。景德二年に進士の第一に挙げられ、将作監丞を授けられ、資政殿大學士、中書門下平章事を歴任した。時に賢相と称せられる。年77で卒し、司空侍中を贈られた。諡は文定。 宋史：卷310
- ・ 李孝廣 不詳
- ・ 先君 米佐のこと。米佐 字は光輔。学問に親しんだとされる。（『米芾』P7・塘耕次・大修館書店・1999年）この『書史』の文章は、父親の面影を伝える貴重な資料といえよう。
- ・ 李柬之（東に作るものもある） 996—1073 字は公明、濮州の人で、李迪の子。仁宗朝で判西京留司御史臺となり、英宗が即位すると、富弼がその学行を推薦した。治平4年に太子少保を以って官を辞した。熙寧6年に年78で卒した。諡は懿靖。 宋史：卷310
- ・ 歐陽詢 557—641 字は信本、潭州臨湘の人。経史に広く通じたという。隋に仕えて太常博士となり、太宗の時に太子率更令、弘文館學士に至った。渤海男に封ぜられる。書を善くして初めは王羲之を学んだが、後に険勁な書風を完成した。著に『藝文類聚』がある。 旧唐書：卷189 新唐書：卷198
- ・ 歐陽通 ?—691 欧陽詢の子。字は通師。高宗、則天武后に仕え、官は中書舍人、殿中監に至り、渤海子に封ぜられた。 旧唐書：卷189 新唐書：卷198

- ・ 張旭 ？－？ 字は伯高、呉郡の人。左率府長史の官に就いたので張長史とも呼ばれる。初め常熟県の尉となり、のち長安に出て、李白・賀知章・顔真卿らと交わった。酒を飲み大酔すると絶叫しながら狂走して草書を大書し、時には頭髪に墨をひたして狂草を書いたので、張顛とも呼ばれる。文宗の時に李白の歌詩、裴旻の劍舞、張旭の草書を三絶となした。 新唐書：卷202

<注・考>

- ・ 李氏については『畫史』にも次のような記事がある。

「濮州李文定丞相家畫三等。上等書名、用名印。中等書字、用字印。下等亦用字印、押字而已。及取鍾王迹甚多、未得見」。

「江東漕李孝廣字世美處有鍾王迹、嘗於金陵重背、拆下背紙、乃捶熟唐人門刺。其孫奉世語余如此。近官太常、遂得見」。